

[道 徳]

補助発問の工夫による道徳的価値の理解を深める実践 - 道徳的な価値を多面的・多角的に考えるための効果的な指導法の工夫 -

中島 大介*

1 主題設定の理由

中学校では平成31年度から、道徳の時間が「特別の教科 道徳」(以下、道徳科)として全面実施される。平成28年度の道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議⁽¹⁾において、今後の社会において求められる能力として、予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要であるとされている。さらに、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出す資質や能力が求められている。道徳科としては、「答えのない課題」に最善解・納得解(自分が納得でき周囲の納得も得られる解)を導くことができる能力や分野横断的な幅広い知識に基づき、俯瞰的に捉える資質が求められる。そのような資質・能力の土台であり、目標でもあるのが、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」であり、道徳性の育成はますます重要となっている。

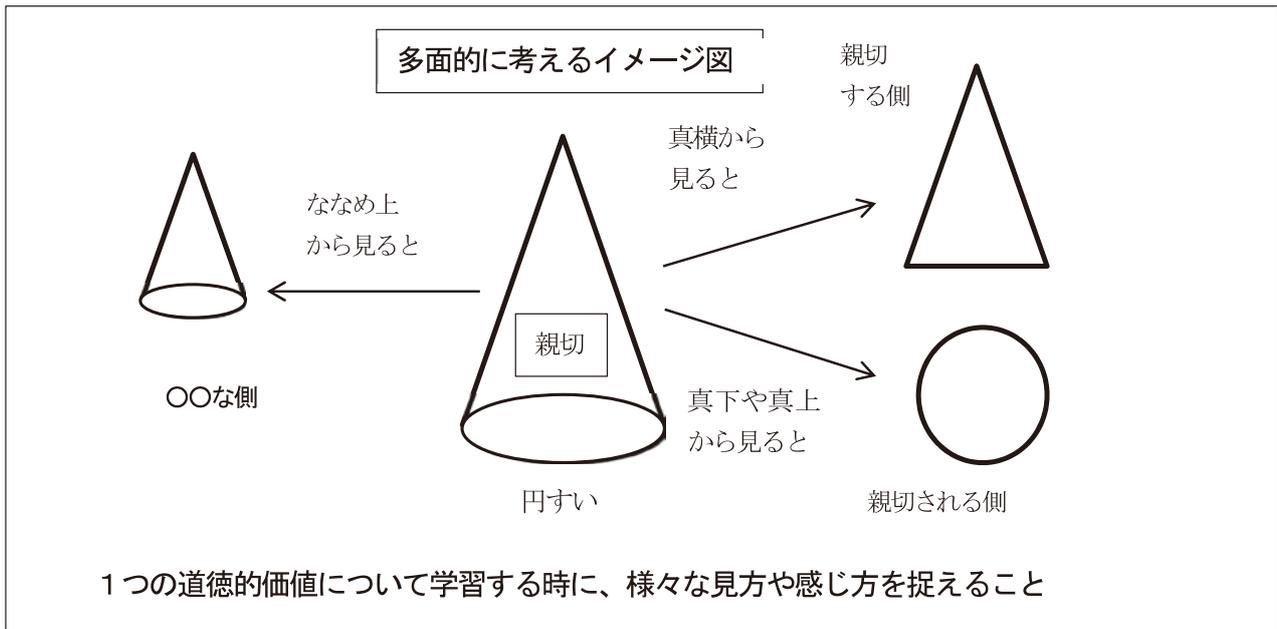
文部科学省では、道徳教育に係る具体的な指導方法や評価等について検討を行い、平成28年7月に単なる話合いや読み物の登場人物の心情の読み取りに偏ることなく道徳科の質的転換を図るためには、学校や児童生徒の実態に応じて、問題解決的な学習など質の高い多様な指導方法を展開することが必要とされている。

質の高い多様な指導方法の一つに、読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習がある。読み物教材の登場人物への心情理解の学習では、登場人物の判断や心情を捉えるために「どうして」や「なぜ」といった言葉を使った補助発問を行い、登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的(図1)に捉え考えるようにした。自分や相手、第三者の周りの人の立場から考えることが様々な道徳的価値を深く理解するきっかけになると考える。そして、さらに多角的な思考を導き出すためにそれぞれの立場の「思い」や「もしこうなったらどうする」などといった未来を予測するような補助発問を加えることで、関連する道徳的価値は何かを多角的に捉え考え(図2)、道徳的価値が深まるようにした。本稿では、登場人物の迷っていることを自分ごとのように置き替え、自分との関わりで捉え考える中心発問やその先の未来のことを考え、様々な道徳的価値を関連付けて捉え考える補助発問により多面的・多角的に思考することで、道徳的価値を深めていく様子を検討していく。

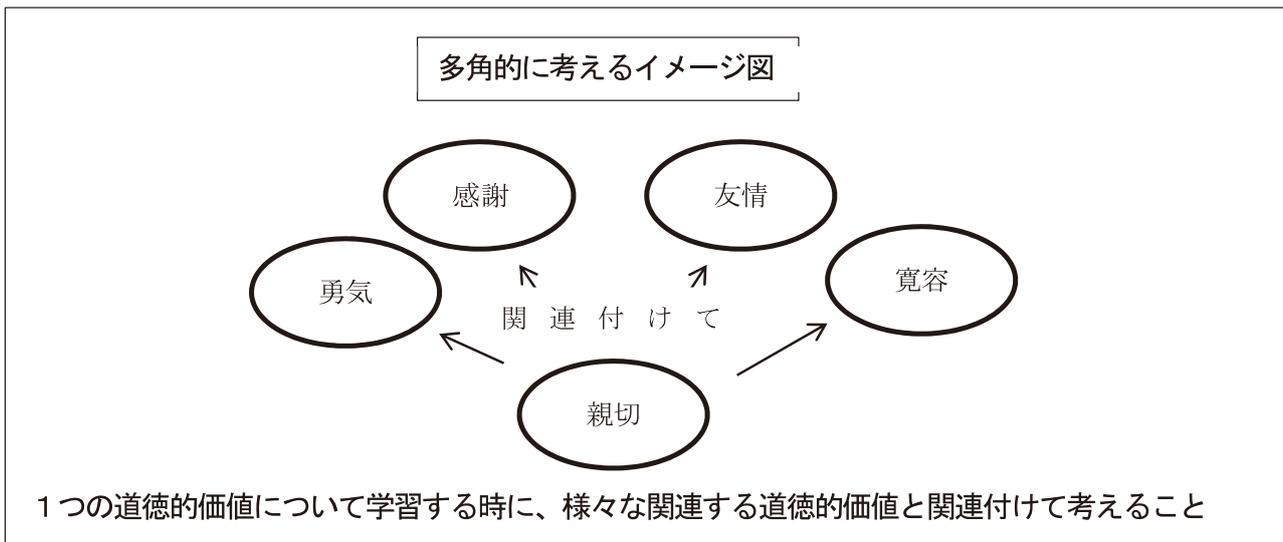
多面的・多角的な思考(抄)⁽²⁾

- ① 多面的な思考・・・様々な見方や感じ方を捉え考えること
- ② 多角的な思考・・・様々な関連する道徳的価値と関連付けて捉え考えること

*長岡市立与板中学校



(図1)



(図2)

2 実践の概要

平成30年7月に、長岡市立与板中学校の3年生の生徒27名を対象に実践を行った。

(1) 主題名

C - (10) 遵法精神, 公德心 B - (6) 思いやり, 感謝

(2) 資料名

「おくれたきた客」(NHKココロ部の映像資料)

美術館の警備員の入場受付である主人公のコジマくんが、閉館後に来たおばあちゃんに対し、入場の断わりを告げる。すると、そのおばあちゃんが今日この日のために医者から外出の許可をもらい、死別した旦那と一緒に行く約束も果たせず、長年ずっと楽しみにしていたと話され、入れさせてよいかどうかと悩み、どう行動すべきか葛藤するところで話は終わっている。

(3) ねらい

前半の映像資料を基に生徒は自分が大切にしている価値観を明確にもち、その後、ペアトークを通して法や規則を守ることの大切さ、思いやりの大切さに気付くことができる。後半の映像資料をもとに、「葛藤」や「衝突」などから「自分ならどうするか」という中心発問を通して、自分が大切にしている価値観を明確にもたせる。さらに、「相手の立場やその先の未来を予測する発問」や、「きまりはどのような意味をもつか」などの発問を、多角的多面的な思考を導き出す補助発問として行うことで、より深い道徳的価値の理解が図れると考える。

(4) 授業の構想

① 導入

自分自身の生活経験を振り返る

- ・今までに人に頼まれて困ったことはないか、どうして困ったのか？

(前半の映像視聴後)

発問1 「コジマくんは何に困っていますか。」

② 展開

ア 問題の把握(価値に気付く、味わう)、問題意識をもつ

- ・物語の場面や登場人物の心情を理解する。何が問題なのかを確認する。
- ・「入れる」→思いやり 「入れない」→きまりを守る の2つの気持ちに気付かせる。

発問2 中心発問：「もしあなたがコジマくんだったら、美術館に入れるか、入れないか？」

イ 自分との関わりで捉えて考える

- ・発問2に対して、「入れる」か「入れない」のどちらかを選択させる。全員がまず、マグネットを黒板に貼ることで自分との関わりの中で自分の大切にしている道徳的価値に気付かせる。
- ・その後、自分の意見の根拠をワークシートに記述し、その後、ペアトーク(2～3人)で発表し合い、ミニホワイトボードを使いながら理由となる道徳的価値を主張する。

(後半の映像視聴後)

発問3 補助発問：「どうしてコジマくんは迷っているのですか。」

「規則にはどのような意味がこめられていますか。」

ウ 多面的・多角的な思考をもつ

- ・おばあちゃんの事情(余命幾ばくもなく、今日のこの日のために医者から外出許可をもらい、ずっと楽しみにしていた美術館への訪問であった)を知った上で中心発問について話し合う。

<おばあちゃんの立場からの発問>

補助発問：「断られたおばあちゃんは、コジマくんのことをどう思っているのでしょうか。」

<コジマくんの立場からの発問>

補助発問：「コジマくんは入れさせないって考えているみたいだけど、本当にそれでよいのでしょうか。」

- ・きまりを守らせる側と守らなければならない側に分けられ、その理由を考えさせる。(多面的)
- ・「もし、入れさせたらどうなるか」など先の未来のことを想像することで、関連した道徳的価値を考えさせるきっかけにつながる。(多角的)

発問4 「もう一度聞きます。もしあなたがコジマくんだったら、美術館に入れますか、入れませんか？」

エ 自らを振り返る

- ・仲間の意見を聞いた上で、それでも自分が大切にしている道徳的価値は何かを明確にもつ。

オ 自己の(人間としての)生き方について考えを深める

- ・まとめでは、ワークシートにそれぞれの立場とその先の未来のことを考えさせることで多くの道徳的価値を関連させながら考える。

(5) 授業の実際

前半の映像視聴後、板書にイラストを提示しながら、場面の状況とコジマくんの気持ちを捉えさせた。その後、中心発問により自分なら「入れる」か「入れない」かのどちらの意見に賛成かを判断させた。さらに、黒板にネームプレートをつけてから自分の選択した理由を考えさせた上で、それぞれの立場から中心発問や補助発問を通して話し合う中で、多面的・多角的に考えた。

① 展開イの様子

<1回目の選択の結果(写真1)>

入れない…27名

入れる…0名

<後半の映像視聴後の両者の意見>

入れない

- ・きまりは守らなければならない。
- ・仕事のきまりだから。
- ・お客さんが時間を守っていないから。
- ・前に来たお客は断ったのだから平等、公平性に欠ける。
次に来たお客も入れなくてなくなる。
- ・もし、この展覧会の主催者に入れたことをばれたら、警備員のコジマくんは首になる。
- ・もし入れたとし観覧時間外で作品を汚したり傷付けたりしたら、このお客の責任になってしまう。
相手の先のことまでも考えてあげることが本当の思いやりである。
- ・人は、心の弱さ、醜さを持ち合わせていると感じた。

迷った生徒の考え

- ・思いやりとルールを守ることを区別することは難しい。

入れてもよいかもしれない

- ・やはり余命が少ない唯一の機会を楽しみにしているおばあちゃんの気持ちを考えると、少しの時間だけでも入れてあげてもよいのでは。ただ、責任は誰が取るのかは分からない。

② 展開ウの話し合いの様子 T:教師 S:子ども

- T (補助発問) : どうしてコジマくんは迷っているのかな?
おばあさんの余命が少ないという状況だけど、本当にそれでいいの?
- S 1 : ……。
- T (補助発問) : かわいそうだな～本当に入れてあげないの?
- S 1 : 仕方がない。警備員としての仕事を果たすべきか、おばあちゃんのことを思っていれさせるべきか。
- S 2 : 気持ちはわからないでもないが…
- T (補助発問) : どうして仕方がないの?
- S 1 : おばあちゃんを入れたら、その前に来たカップルがかわいそうだから。
- T (補助発問) : もしおばあちゃんを入れてしまったらどうなる? その先に何が待っているかな?
- S 1 : 喜ぶと思うが、コジマくんは首になる。規則違反になって。
- S 3 : もし館内で絵を傷つけてしまったら、おばあちゃんが悪者になってしまう。
- S 4 : 警備員の仕事は閉館時間後も入れないという責任がある。入れてあげないことこそ、おばあちゃんへの思いやりにつながる。



(写真1 選択した立場の様子)

< 2 回目の選択の結果 (写真 2) >

入れない…26名

入れる…0名

入れてもよいかもしれない…1名

上記のように、それぞれの理由を聞いていく中で、S1が「仕方がない」という答えには、「きまりを守る」や「思いやり」の道徳的価値の葛藤がみられ、そのつながりを感じることができたと考えられる。また、その後、来た若いカップルのことを考え、「平等」や「公平」の価値についてもつながりを感じていた。ルールは何のためにあるか、誰のためにあるかなど、きまりを守り、責任をもつことこそ、相手を思いやることにつながるという様々な道徳的価値を中心発問や補助発問によって捉えていたと言える。



(写真 2 選択した立場における価値の深まり)

3 考察

(1) 記述をもとにしたデータより (27人分の記述より)

本実践における生徒の姿から、入れるか入れないか2択の中心発問を設定することで、全員が自分の意見としての道徳的価値を基に話し合いに参加できた。そして、さらに補助発問により一面的ではなく多角的・多面的な見方ができるように、様々な発問を問いかけた。それにより、生徒は登場人物の両者の気持ちを考えたり、道徳的価値に関連付けたりして考えることができた。

(2) 抽出生徒の記述より

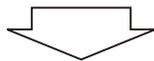
資料1、2は二人の抽出生徒A・Bの記述の一部である。二人とも、活動を通して多くの意見を取り入れ、「気付き」や「心の揺らぎ」、「変容」が読み取れる。

抽出生徒Aは、正義感が強いが、自分の意見をあまり主張できず、物事を深く考えることの課題をもっている。

抽出生徒Bは、規範意識が高く、自分の意見を曲げず、人の意見を受け入れないことが多いという課題をもっている。

視聴後の記述より：「入れない」を支持

- 時間に遅れてきたから入れない。
- ルールを守った方がよい。



振り返りより：「入れない」を支持

- 現在のことだけでなく、相手の先の未来のことまで考えることができた。

きまりってというのは、自分が幸せになることよりも、多くの人が幸せになるのがきまりだと感じた。

(資料1 抽出生徒Aの記述)

視聴後の記述より：「入れない」を支持

- 警備員が規則を守ることが役目であり、規則を破るなどどんな理由があってもはならない。「それくらいという思いが良くない。」そういうことが大きな事態を招いてしまう。



振り返りより：「入れてもよいかも」に変化

- 場合によっては、きまりを破ることが必要なときがあるという思いはあった。自分のことしか考えていなく、おばあさんの置かれている状況をもっと考えてあげてもよいと思った。

(資料2 抽出生徒Bの記述)

4 成果と課題

(1) 成果

実践を通じて、中心発問の「入れる」、「入れない」という問いにより、生徒全員が自分の大切にしている価値を基に立場を決め、話し合う環境をつくることができた。さらに補助発問により、きまりの必要性を深く追究して考えられるようになれたり、きまりを守る側と守らせる側のそれぞれの立場で多面的に考えたりすることができた。また、「本当の思いやりとは何か」についても、相手の先の未来のことまで考えた上での思いやりが大切であること、平等や公平な視点できまりを守ったりすることが本当の思いやりであることなど、多面的・多角的な視点で様々な道徳的価値に結び付けて考えることができていた。

(2) 課題

1つ目は、補助発問を通してどのくらい自分の考えが変わり、広がったのかを全体で共有する場がなかったことである。ただ感想を書くだけで授業を終わらせず、全体で発表し、共有することで友達の考えと比較しながら自分の考えを改めて振り返ることができたであろう。

2つ目は、授業者の補助発問のねらいの明確化である。その補助発問は何を考えるきっかけになるのかを授業者が明確に意図していなければならない。それにより子たちの気付きや関連する道徳的価値の数も増えると考えられる。話し合いを通して気付いた様々な道徳的価値がどのように関連付けられるのかを板書し、可視化することで多面的・多角的に考えることができると考える。

5 おわりに

道徳の授業において大切なことは、授業者の中心発問や補助発問がどのような道徳的価値を考えるきっかけになるのか、生徒に何を考えさせたいのかをしっかりと明確にもつことである。今回は、自分なら「入れる」か「入れない」かのどちらを選ぶかという極めてシンプルな内容であった。中心発問によりその道徳的価値の本質を理解したり、補助発問により相手や第三者の立場で考えられるようになったりすることで考えが広がり、深まることが実感できた。

道徳的価値を多面的・多角的に考えるためには、自分の考えをもつこと、そしてそれをペアやグループ、学級全体で表現し合うことができる学級づくりが大切である。どの意見も聞いてもらえる、誰もが大切にされる人権意識の高い学級づくりにこれからも努めていきたい。今回の実践を通して、私自身も普段の道徳の授業から多面的・多角的に考えさせるためにはどう発問したらよいか、改めて発問の大切さを考える機会となった。これからも実践を重ねて、より効果的な指導法を検討していきたい。

<註>

- 1) 中央教育審議会 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門会議「『特別な教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」平成28年7月
- 2) 長谷川 晋 平成30年度 長岡市与板中学校校内研修会（道徳）資料

【参考文献】

- 浅見 哲也 平成30年度新潟県立教育センター 豊かな心をはぐくむ道徳教育研修講座資料
- 中央教育審議会 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門会議「『特別な教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」平成28年7月
- 文部科学省 「学校教育法施行規則」一部改正 平成27年度3月